

9世紀における瑞花双鳥文八稜鏡の初源形式

長久 智子

はじめに

日本製青銅鏡の形式のうち外形が八稜形をなし、内区文様に一對の植物文と双鳥文を交互に表すものを瑞花双鳥文八稜鏡と称する。平安時代初期（9世紀後半頃）に現れるこの形式は従来、中国・唐時代の八稜・八花鏡を祖型とし、その文様モチーフを日本で取捨選択・再構成したものとされている。本論は中国・唐時代における八稜・八花形鏡の盛期と日本における瑞花双鳥文八稜鏡の出現時期に約半世紀の隔りがある点、また瑞花双鳥文八稜鏡の出現以前の日本製鏡、いわゆる唐式鏡にも八稜形の作例がほとんどない点を指摘した上で、唐八稜鏡と瑞花双鳥文八稜鏡をつなぐ形式を持つ大陸製花鳥文稜・花形鏡が9世紀に存在した可能性を導くことを目的とする。

まず出土作例を中心に型式分類を行い、日本における瑞花双鳥文八稜鏡の出現年代とその形式を明確にする。次に、祖型とされている唐時代の稜形・花形鏡、そして舶載唐鏡を原型とする唐式鏡の作例を挙げ、瑞花双鳥文八稜鏡形式が出現する素地となる可能性を検討する。最後に、唐時代の八稜鏡と瑞花双鳥文八稜鏡をつなぐ形式を持つ大陸製花鳥文稜・花形鏡の存在を示唆する作例として、晩唐期以降の製作と考えられる大陸製花鳥文稜形鏡の作例を検討する。ここから結論として、盛唐期の唐鏡を祖型とする晩唐期以降の大陸製瑞花双鳥文八稜鏡が存在したことが推定され、この形式が日本の瑞花双鳥文八稜鏡の直接の原型となった可能性が高いことを指摘する。すなわち日本の瑞花双鳥文八稜鏡は唐鏡を日本独自に再構成した形式であるという従来説を否定し、唐・奈良時代以降にもたらされた新しい大陸の一形式の発展型である可能性を提示する。

1. 研究史概略

瑞花双鳥文八稜鏡について、唐鏡をもとに再構成した日本の鏡であると明文化したのは高橋建自氏が嚆矢で、奈良時代の舶載唐鏡から「日本独自の和鏡」へ推移する中間形式とする（註1）。続く広瀬都巽氏（註2）、後藤守一氏（註3）、中野政樹氏らもこの説を踏襲し、また唐鏡、唐式鏡といった用語の定義を行う。現在、中野政樹氏による「唐式鏡」の定義（1. 舶載唐鏡 2. 唐鏡を原型として日本で再范鑄造した鏡 3. 唐鏡を模して日本で原型をおこし鑄造した鏡、が含まれる広範なもの）と、その対極として、平安時代に現れる日本独自の文様を持つ鏡（註4）である「和鏡」の定義が通説となっている。さて、瑞花双鳥文八稜鏡についての数少ない先行研究は現在のところ考古学的見地からの編年を主眼としたものに限られている。ところが平安時代の瑞花双鳥文八稜鏡には紀年銘のある作例、年代の明らかな出土作例は少なく、半世紀幅以上の編年は難しい。そうした編年試案と併行して、唐鏡と伝世作例をどのように関連づけるかという研究がある。まず、広瀬都巽氏が四種類の唐鏡から派

生させる複系列編年（註5）を試みた。しかし、唐時代の八稜・八花鏡から瑞花双鳥文八稜鏡までの時期的・形式的な飛躍を説明するまでには至っていない。広瀬氏以降の編年試案として、杉山洋氏が出土作例を交えた単系列編年を試みるものの、文様変遷を単系列に考察した結果として型式分類に矛盾が生じ、逆に瑞花双鳥文八稜鏡形式が複系列で発生、推移することを示唆する結果となった（註6）。いまひとつ、唐鏡と瑞花双鳥文八稜鏡の関係性については広瀬氏の提示した編年試案と、原型として設定された四種類の唐鏡形式を肯定する後藤守一氏の考察がある（註7）。

唐鏡と瑞花双鳥文八稜鏡には、双鳥文や八稜形といった共通の構成要素が存在する一方で、本来ならば線対称に相對するべき双鳥文が左右で倒立して点对称的な構図となる点、鳥文と植物文を鈕を中心に点对称で配置する点、唐鏡にも他工芸品にも類例のない植物文（いわゆる「瑞花」文）等、瑞花双鳥文八稜鏡のみの要素も存在する。こうした造形的特徴を日本で独自に考案された要素と結論できうるだろうか。そこでまず瑞花双鳥文八稜鏡の構成要素を型式分類し編年を試みた上で、祖型とされる唐鏡・唐式鏡形式との比較対象とするためにその最初期の形式を導くことにする。

2. 文様・鏡胎形式の型式分類と編年

写真・拓本、実見作例を文様および鏡胎形式から型式分類・検討する。以下、まず鏡胎形式の型式分類基準を述べる（図1）。

[縁] 縁の断面の形状によって3種類に分類する。「直角厚縁」は直角に近い台形で、なおかつ上部が平坦であるもの。「台形縁」はいわゆる蒲鉾式縁である。「直角細縁」は台形縁より外側がさらに垂直になり、また厚みも増すもの。

[界圏] 外区と内区を区切る界圏の形状によって3種類に分類する。「無圏」は界圏が表されない。「円圏」は界圏が円形であるもの、「稜圏」は界圏が外形と同じく八稜形であるものである。

[外区と内区の段差] 界圏によって区切られた外区と内区の段差を3種類に分類する。「高」は内区の胎厚のおよそ2倍以上のもの。「低」はそれ以下のもの、「無」は段差の全くないものとした。

[鈕孔] 「円」と「半円」の2種類に分類する。唐鏡は半円状の鈕孔を持つ特徴がある。後述するように唐鏡はほとんど揚州で鑄造されているとされているので、半円状の鈕孔を製作する工房グループはこうした地域の唐鏡鑄造技術を受け継いでおり、正円状の鈕孔を製作する工房グループは別系統の鑄造技術集団であると考えられる。

次に文様形式の型式分類基準を述べる。

[群] 内区に表される主文様である鳥の数で3群に分類する。「A群」は鳥が2羽の型式。「B群」は鳥が3羽の型式。「C群」は鳥が4羽の型式。これはつまり鏡背文様の区画分割数を示す。

[類] 鳥文の種類によって4類に分類する。「I類」は双鸞形（註8）の鳳凰文。「II類」は舞鳳形の鳳凰文（註9）。「III類」は鴛鴦文である。「IV類」は双鸞形と舞鳳形の鳳凰文の組み合わせで、I類とII類の折衷型式とした。

[式] 鳥文の配置構成によって4式に分類する。「1式」は鈕を中心に相對する線対称の構図。「2式」は鈕を中心に旋回する点对称の内向構図。「3式」は鈕を中心に旋回する点对称の外向構図。「4式」は2式と3式の折衷型式で、C群にのみ存在する。

鳥文の型式分類に加えて、内区のもうひとつの主文様である植物文を8分類する。

[扇状瑞花文I] 蕊が扇状に開き、先端部に球状の葯、さらにその上部にアーモンド形の花弁を表す花卉文である。瑞花は中央に配置され、蕊中央部から2枚ないし4枚の葉が左右対称に伸びる型式。

[扇状瑞花文II] 花が2つ表され、葉を中心に左右対称に花が伸びる型式。

[扇状瑞花文 III] 蕊が半円形になり、アーモンド形の花弁は中央に稜を備え、その先端部は鋭くなる。扇状瑞花文 I がより技巧的に変化した型式と考えることができる。

[つる草文] 花卉はなく、つる状の茎部分のみが大きく 1 巻きする植物文。

[葉文 I] つる草文の発展型と考えられる。1 本のつる草状の茎から葉が伸びる折枝型式。

[葉文 II] 1 本の茎から左右対称に葉を広げ、茎の先端にアーモンド形の蕾がつく型式。

[葉文 III] 二等辺三角形のシダ様の葉が左右対称に配される型式。

[つる状瑞花文] 左右対称に細い茎が伸び、中心に特異な花卉文が表される型式。

上記各型式をもって分類する(表 1)。対象作例は、全国出土八稜鏡(附表)、広瀬都巽の瑞花双鳥文八稜鏡拓本資料(以下「広瀬拓本集」と略称、集成総数 86 面)、また一部の伝世作例中のうち文様・鏡胎形式の明瞭であるもの総計 146 面とする。なお、出土八稜鏡は管見の限りでは現在総数 338 面、うち草花文鏡・無文鏡 79 面と破片 17 面を除き、なおかつ文様・鏡胎両形式が明白な作例は 108 面である。以下、型式別にその形式と特徴をみる(表 2)。

I 類(双鸞形)には A 群(2 羽)型式 30 面、B 群(3 羽)型式はなく、C 群(4 羽)型式が 1 面、分類される。なかでも A 群型式の 2 式(内向旋回)が 27 面(A 群中の 90%)であり、これが I 類の主流である。この[A 群-I 類-2 式]形式には、旧・京都府竹野郡鳥取村(現・京都府京丹後市弥栄町)木棺墓出土鏡(以下「鳥取村墳墓出土鏡」と略称、東京国立博物館蔵、挿図 1)が含まれる。鳥取村墳墓出土鏡は伴出遺物に石帯をもち、同墳墓には同様の木棺墓形式に比して 9 世紀前半の年代を充てることのできる作例である(註 10)。本作例が半円状の鈕孔グループである点、また[A 群-I 類-2 式]形式中でも半円状の鈕孔グループである点で、唐鏡系列の技術を持つ工房の製作とみる。

II 類(舞鳳形)は A 群型式 74 面のみで、B 群型式、C 群型式はない。その内訳は 3 式(外向旋回)が 56 面、2 式が 17 面、1 式(線対称)1 面である。II 類のうち 75%を占める[A 群-II 類-3 式]形式には、永延 2 年(988)刻銘鏡(個人蔵、挿図 2)、長野県松本市・南栗遺跡 SK176 出土鏡(以下「南栗遺跡出土鏡」と略称、挿図 3)が含まれる。南栗遺跡 SK176 は伴出の灰釉椀が虎溪山 1 号窯式であることから 10 世紀後半の年代を充てることのできる(註 11)。さらに、この南栗遺跡出土鏡が植物文中の葉文 II との組み合わせを持つ形式であることに着目すると同じく葉文 II と組み合わせる[A 群-II 類-3 式・葉文 II]形式は 3 式の 75%にのぼる 42 面が確認でき、内 41 面は円形の鈕孔グループである。このことから[A 群-II 類-3 式・葉文 II]形式は、鈕孔を円形に製作する工房グループによる製作であるといえる。[A 群-II 類-3 式・葉文 II]形式の出土鏡年代は、ほかに福島県郡山市・馬場中路遺跡 4 号住居跡出土鏡(挿図 4)が伴出黒色土器から 10 世紀末-11 世紀の年代を与えうる(註 12)こと、また広島県福山市・亀山 1 号古墳 SX1028 出土鏡(挿図 5)も伴出黒色土器から同年代を与えうる(註 13)こと、さらに 2006 年に出土した岩手県北上市・国見山廃寺跡 SB043 付近出土鏡(挿図 6)も 10 世紀後半から 11 世紀の年代を与えられている(註 14)。これらの出土作例から[A 群-II 類-3 式・葉文 II]形式が発展・流通した年代を 10 世紀後半-11 世紀と推定することが可能であり、この年代を円孔製作工房の最盛期とみることもできる。

III 類(鴛鴦形)は A 群型式に 37 面、B 群型式に 1 面ある。3 羽型式の B 群については、現状では三分割構図は非常に特殊な形式である。また A 群型式では 3 式が 35 面と、III 類の 94%を占めており、この群の主流は[A 群-III 類-3 式]形式である。この形式で組み合わせられる植物文は、つる状瑞花(14 面、III 類中 37%)と扇状瑞花 III(10 面、III 類中 27%)が多く、[A 群-III 類-3 式・つる状瑞花]形式と[A 群-III 類-3 式・扇状瑞花 III]形式が主流であったと結論する。この類でも円孔製作工房の作例が半円孔製作工房のそれより勝っている。さらに、I 類・II 類の作例では円圈型式が主だが、III 類で

は両製作工房とも圧倒的に稜圍型式が多いことが指摘できる。この類の主流である [A 群-III 類-3 式・扇状瑞花 III] 形式の作例に (旧) 兵庫県神戸市・石峯寺経塚出土鏡 (以下「旧石峯寺鏡」と略称、神戸市立博物館蔵、挿図 7) がある。この作例は兵庫県神戸市・石峯寺境内経塚出土品ではなく福岡県・某処経塚で出土した資料である可能性が濃厚であるものの、文献資料から本作例と奥書銘経巻はやはり従来通り伴出と考えるとよい (註 15)。そこで本作例の推定製作年代を経巻奥書にある永久五年 (1117) によって、12 世紀前半に設定することができる。さて、各形式を持つ出土鏡を整合し、それぞれの主流形式におおよその年代を当てはめると以下ようになる。

I 類 (双鸞形) - A 群 (2 羽) - 2 式 (内向旋回) - 葉文 II / 扇状瑞花 I / つる草 : 半円鈕孔工房系

基準作例 : 鳥取村墳墓出土鏡 年代 : 9 世紀前半

II 類 (舞鳳形) - A 群 (2 羽) - 3 式 (外向旋回) - 葉文 II : 正円鈕孔工房系

基準作例 : 南栗遺跡出土鏡 年代 : 10 世紀後半 - II 世紀

III 類 (鴛鴦形) - A 群 (2 羽) - 3 式 (外向旋回) - つる状瑞花 / 扇状瑞花 III

基準作例 : 旧石峯寺経塚鏡 年代 : 12 世紀前半 : 正円鈕孔工房系

つまり、日本の瑞花双鳥文八稜鏡はまず 9 世紀頃に半円鈕孔工房系 = 唐鏡系工房によって「I 類 (双鸞形) - A 群 (2 羽) - 2 式 (内向旋回) - 葉文 II / 扇状瑞花 I / つる草」形式が製作されはじめ、その後、正円鈕孔工房系の製作による「II 類 (舞鳳形) - A 群 (2 羽) - 3 式 (外向旋回) - 葉文 II」形式が主流となる。この正円鈕孔工房系が半円鈕孔工房系とどのような関係にあるのかは明らかではないが、この正円鈕孔工房系が II 類・III 類という新しい鳥文を 2 回にわたって取り入れていることなどから、少なくとも半円鈕孔工房系にみる従来の 8 世紀の唐鏡系技術系統ではなくおそらく 9 世紀になって新規導入された鑄鏡技術系統に属すると考えられ、この 9 世紀になんらかの形で新しい技術、新しい鏡形式が日本に導入された可能性がみえてくる。

3. 唐鏡・唐式鏡にみる稜形鏡・花形鏡の検討

唐鏡における稜形鏡・花形鏡には、八稜・六稜、八花・六花形がある。現在までのところ、八稜鏡では神龍二年 (706) 河南省偃師市・宋偵墓から出土した作例 (挿図 8) がもっとも早い例である (註 16)。紀年唐墓出土鏡の総数 78 面のうち、八稜鏡は 10 面、八花鏡は 11 面知られている。これを時期別にみると、700 年 - 725 年では八稜鏡 46% (6 面) 八花鏡 7% (1 面) 六稜鏡 7% (1 面)、725 年 - 750 年では八稜鏡 21% (3 面) 八花鏡 28% (4 面) 六稜鏡 14% (2 面) 六花鏡 7% (1 面)、750 年 - 775 年では八花鏡 33% (4 面)、775 年 - 800 年では八花鏡 8% (1 面) 六花鏡 25% (3 面)、800 年 - 907 年では八稜鏡 3% (1 面) 八花鏡 3% (1 面) となる (% は各期紀年墓出土鏡総数中の割合)。つまり稜形鏡は 8 世紀第 1 四半期にもっとも多く、8 世紀第 2 四半期にかけては花形鏡が主流となり、8 世紀第 3 四半期以降は円形や方形が主流となっていく傾向にある。

さて、紀年唐墓出土八稜鏡にみる文様では、双獣双鳥旋回文が 40% (4 面) 鳥旋回文が 30% (3 面) 騎仙双獣旋回文が 10% (1 面) 瑞獣文が 10% (1 面) 素文が 10% (1 面)、六稜鏡では双獣双鳥旋回文が 100% (3 面) である。一方、八花鏡では双獣双鳥旋回文が 9% (1 面) 鳥旋回文が 9% (1 面) 双鳥相對文が 37% (4 面) 双獣相對文が 9% (1 面) 飛仙旋回文が 9% (1 面) 雲龍文が 9% (1 面) 伯牙弹琴鏡が 9% (1 面) 草花文が 9% (1 面)、六花鏡では蓮花文が 25% (1 面) 双鳥銜綬旋回文が 50% (2 面) 草花文が 25% (1 面) となる (% は紀年唐墓出土稜形・花形鏡総数中の割合)。つまり稜形鏡の文様は旋回形式 (3 式)、花形鏡の文様は線対称形式 (1 式) が主流であったと結論する。

中国での稜形・花形鏡製作状況が明らかになったところで、次に奈良時代の日本の唐式鏡を検討す

ると、唐鏡をどのように受容したかが明らかになってくる。現在判明している出土・伝世唐式鏡の総数215面から無文鏡を除く184面のうち、八稜形は14面(7%)、八花形は57面(31%)、六花形は5面(2%)である。これは9世紀以降約3世紀にわたって主流であった瑞花双鳥文八稜鏡形式の前段階としては意外であるが、8世紀の日本においては鏡の外形の主流は円形で八稜形は主流ではなかった。その八稜鏡の作例には以下のものがある。

(1) 唐花八稜鏡 [秋田県仙北郡中仙町出土、水神社蔵] 径14cm (挿図9)

扇状にひろく花卉の上部に双鸞形の水鳥を置き、左右に葉がひろく文様を1単位として、鈕を中心に4単位配置する。各単位の間には蝶文が配される。界圏がなく、鈕も鈕孔も類例のない型式で、総体に舶載唐鏡とは趣が異なる。

(2) 飛雲花喰鳥八稜鏡 [栃木県日光市男体山山頂遺跡出土、二荒山神社蔵] 径17.9cm (挿図10)

半球状の鈕、内区と外区の段差などには唐鏡の影響が残るものの、本鏡と同様の文様形式は唐鏡にはない。

(3) 飛雲双鸞双鳳八稜鏡 [栃木県日光市・輪王寺伝世] 径14.4cm (挿図11)

I類(双鸞形の鳳凰文)とII類(舞鳳形の鳳凰文)を鈕中心に交互に旋回させる。縁の上部は幅広く平坦で、界圏はない。

(4) 月宮八稜鏡 [群馬県富岡市・貫前神社伝世] 径20.6cm (挿図12)

舶載唐鏡であるが、この月宮文形式は日本にはほかに出土・伝世例がない。

(5) 花卉麟鳳八稜鏡 [長野県茅野市守屋ヶ岳山麓出土、諏訪神社蔵] 径25.8cm (挿図13)

草花文の表現には篋押し技法かと思われる部分がある。

(6) 唐草飛禽八稜鏡 [三重県鳥羽市・八代神社伝世] 径9.1cm (挿図14)

同範八稜鏡が同社に一面ある。唐鏡には例があるが、日本ではほかに出土・伝世例がない。

(7) 唐花唐草八稜鏡 [奈良県奈良市・東大寺法華堂本尊不空羂索観音像宝冠嵌装] 径5cm (挿図15)

宝冠内部頭頂部に嵌装されている(挿図16)。唐鏡小型鏡にある植物文とみることができる。

(8) 仙人花虫背八角鏡 [奈良県奈良市・正倉院南倉34号] 径11.4cm (挿図17)

鶴・一角獣・獅子に騎乗する4仙人を旋回させる構図で、唐鏡の踏み返しであろう。同範鏡が正倉院南倉35号八角鏡、南倉36号八角鏡である。この文様形式はほかに日本では例がない。

(9) 鳥獣花背八角鏡 [奈良県奈良市・正倉院南倉12号] 径51.5cm (挿図18)

(10) 花鳥背八角鏡 [奈良県奈良市・正倉院南倉33号] 径14.6cm

舶載唐鏡と考えられる。以上、正倉院蔵鏡は白銅製。

(11) 花禽双鸞八稜鏡 [奈良県五条市靈安寺塔址出土] 径12.5cm (挿図19)

同範鏡は6面、うち5面は八花形。舶載唐鏡を踏み返したものである。

(12) 鳳馬八稜鏡 [奈良県吉野郡金峯山伝来、東京藝術大学大学美術館蔵] 径20.8cm (挿図20)

唐鏡に似るが、文様の配置の乱れなどから日本製とされる。

(13) 唐草麟鳳八稜鏡 [京都府京都市・稲荷大社伝世] 径21.8cm

(14) 双龍双鳥八稜鏡 [兵庫県宝塚市平井古墳出土] 径13cm (挿図21)

線対称の構図である。同範鏡は2面、いずれも八花形。

八花鏡の作例には以下のものがある。

(1) 狻猊双鸞八花鏡 [栃木県日光市男体山山頂遺跡出土] 径9.2cm (挿図22)

同範鏡は八花形8面、円形1面。相対する双鸞形の鳳凰文、すなわちI類-1式で、植物文ではなく狻猊(獅子)を配した構図。唐鏡の踏み返しである。

- (2) 瑞雲双鸞八花鏡 [千葉県香取郡・香取神宮伝世] 径 11.7cm (挿図 23)
同範鏡は八花形 9 面、円形 1 面。相対する双鸞形の鳳凰文、すなわち I 類 - 1 式で、植物文ではなく雲文を配した構図。唐鏡の踏み返しである。
- (3) 唐花双鸞八花鏡 [千葉県香取郡谷津経塚出土] 径 16.1cm (挿図 24)
相対する I 類 - 1 式と、植物文と鳥文が配される。舶載唐鏡と考えられる。
- (4) 双龍双鳥八花鏡 [和歌山県東牟婁郡・那智大社伝世] 径 13cm (挿図 25)
舶載唐鏡。同範鏡は八花形 1 面、八稜形 1 面。八稜鏡(14)の兵庫県・平井古墳鏡である。
- (5) 盤龍八花鏡 [奈良県生駒郡・法隆寺伝世] 径 27.5cm (挿図 26)
舶載唐鏡。盤龍文は本鏡のほか(8)正倉院北倉 16 号鏡と(14)大分県鏡しか日本には出土・伝世作例がない。
- (6) 花卉双蝶八花鏡 [奈良県奈良市・興福寺金堂出土鎮壇具] 径 6.95cm (挿図 27)
同範鏡は正倉院南倉 38 号鏡・奈良県西大寺金堂址出土鏡など八花形 6 面。鈕中心に蝶文と花枝文を配するが、唐鏡には同じ形式がないので踏み返しではない。
- (7) 唐花双鸞八花鏡 [奈良県奈良市・興福寺金堂出土鎮壇具] 径 15.6cm (挿図 28)
同範鏡が香川県・極楽寺址から出土している。先の(6) 花卉双蝶八花鏡同様、興福寺金堂須弥壇鎮壇具として埋納されたことから、本鏡は養老四年(720)以前に舶載された唐鏡であると考えられる(註 17)。唐鏡では花形鏡は 8 世紀第 2 四半期に多くみられるようになるという前章の結果を裏付けるもので、その早い段階の作例として重要である。
- (8) 盤龍八角鏡 [奈良県奈良市・正倉院北倉 16 号] 径 31.7cm (挿図 29)
- (9) 鳥獸花背八角鏡 [奈良県奈良市・正倉院北倉 1 号] 径 64.5cm (挿図 30)
- (10) 鳥獸背八角鏡 [奈良県奈良市・正倉院北倉 3 号] 径 43.0cm (挿図 31)
- (11) 花鳥背八角鏡 [奈良県奈良市・正倉院北倉 14 号] 径 33.6cm (挿図 32)
以上、正倉院蔵鏡は近年の蛍光 X 線分析によって舶載唐鏡と考えられる(註 18)。
- (12) 鸚鵡花綬八花鏡 [京都府京都市・醍醐寺伝世] 径 17.7cm (挿図 33)
唐鏡には頻出する文様形式であるが、日本ではほかに(11)正倉院北倉 14 号鏡、鳥取県・三佛寺伝世円鏡があるのみである。いずれも舶載唐鏡。
- (13) 伯牙彈琴八花鏡 [大阪府藤井寺市・道明寺天満宮伝世] 径 14.15cm (挿図 34)
同範鏡のうち八花形 2 面、円形 9 面。本鏡は舶載唐鏡と考えられる。伝・菅原道真遺愛品。
- (14) 盤龍八花鏡 [大分県別府市]
文様が鮮明でないことから、日本製である可能性を指摘されているが詳細は不明(註 19)。六花鏡には以下の作例がある。
- (1) 唐花六花鏡 [奈良県奈良市・東大寺金堂須弥壇出土鎮壇具] 径 9.5cm (挿図 35)
銀貼鏡を原型にした踏み返し鏡と考えられている(註 20)。同範鏡は正倉院南倉 37 号鏡ほか 2 面。
- (2) 双鸞狻猊六花鏡 [京都府乙訓郡・長野古墳出土] 径 14.8cm
詳細は不明。

中国本土における出土鏡のうち紀年墓出土稜形・花形鏡、そして日本出土・伝世の唐式鏡を比較してみると中国での八稜鏡・花形鏡は 8 世紀第 1-2 四半期頃を生産のピークとしており、それはほぼ日本での唐式鏡の生産時期と歩を同じくしていることが、興福寺鎮壇具唐鏡や正倉院宝物鏡などから判明する。しかし文様形式においては、唐鏡では相当数みることができ文様が日本の唐式鏡では稀である例や(「鸚鵡花綬八花鏡」)、「伯牙彈琴鏡」のように特定の文様が多く踏み返されている例がみら

れる。中国では8世紀前半から中葉にかけて花鳥文稜形・花形鏡が大きな主流であった。後述するようにそれは、唐時代、一大鑄鏡地域として高名であった江蘇省・揚州の名物として詩に謳われてもいる。それを受けて日本・奈良時代でも花形・線対称の双鳥文鏡が一定数受容されてはいるが、稜形鏡は非常に少ない。それでは、正倉院宝物鏡群や東大寺法華堂宝冠嵌装鏡を除くとわずか10面しか作例が確認できない八稜形式が、唐鏡の八稜形式から約50年間の時間差を経て、どのような経緯で9世紀前半に日本で瑞花双鳥文八稜鏡として忽然と、かつすでにひとつの完成された形式として再登場するのだろうか。次に、盛唐期以降・9世紀頃の製作と考えられる唐鏡系鏡の形式を検討する。

4. 大陸製双鳥文八稜鏡の作例

双鸞形鳳凰文が鈕を挟んで相対する八花形の唐鏡には、日本の瑞花双鳥文八稜鏡にみる2式の倒立する鳥文形式はない。ところが、唐鏡を模倣したと思われる製作地不詳の倒立する鳳凰文形式の八花鏡が存在する。管見の限りでは以下の5点が確認できる。

1. 東京芸術大学大学美術館蔵 径21.3cm 縁高0.6cm 重1120g (挿図36)
2. 大阪歴史博物館蔵 径20.3cm 重683.9g (挿図37)
3. 個人蔵 (『鏡の美—讃岐出土・伝来の和鏡を中心として』高松市歴史資料館、1995年掲載)
径21.2cm 縁高0.4cm
4. 泉屋博古館蔵 (『泉屋清賞続編 鏡鑑部』濱田耕作編、1926年掲載) 径21.51cm 重918.75g
5. 韓国・国立中央博物館蔵 (開城付近出土) 径21.6cm

このうち実見する機会を得た東京芸術大学美術館蔵鏡(以下、芸大鏡と略称)と大阪歴史博物館蔵鏡(以下、大歴博鏡と略称)を中心に検討する。東京芸術大学大学美術館蔵鏡は径21.3cm、縁高0.6cmで、個人蔵鏡・泉屋博古館蔵鏡・国立中央博物館蔵鏡とほぼ同じ寸法であるが、若干重が異なる。内区と外区の段差はほとんどなく界圏が凸線で表現され、縁が直角に立ちあがり上部は幅広く平坦であるという朝鮮半島製の鏡にみられる特徴をもつ。また文様の肉は非常に浅く、全体に模糊として踏み返し鑄造の可能性が高い。鈕は半球形をしており、縁よりも高い。また鈕座はなく、鈕孔は革紐が通されているため不完全な確認であるが半円状である。総体つやのない黒褐色で、部分的に緑青を生じている。鳳凰文は双鸞形で、綬を銜える古様形式である。植物文はつる草状の折枝と、右方向へ散る1葉で文様単位を構成しているが、本来ならば双鳳文と等間隔に配されるべきところ中心軸が傾斜してバランスを崩している点、外区文様が省略されている点などやはり本鏡が唐鏡ではなく唐鏡系統に属する別のグループであることを示唆している。大歴博鏡もやはり内区と外区の段差がほとんどなく、界圏は凸線で表現される。縁の側面・上部にはヤスリで平らにならした形跡があり、一部大きく凹凸すら出来ており、その製作工房の技術レベルの一端を示している。文様の肉もやはり薄い、その上辺はほぼ平坦にならされている。また鈕は芸大鏡と同じくかまぼこ形をしており、縁よりも高く、その上部はやや平面に近い。鈕座はなく、鈕孔はやはり半円状である。総体にぶい緑青に覆われており、鬆や欠けがある。鳳凰文・植物文は芸大鏡と同じ表現をとるものの、いっそう細部に繊細さがなくなり、その鑄上がりと相まって全体に鈍重な雰囲気をもっていることから、芸大鏡よりもさらに踏み返しを繰り返した結果とみることができる。

この「瑞花双鸞銜綬八花鏡」は重量には多少の差はあるものの5面とも径21cm前後で、文様形式はまったく同じである。法量は唐鏡とほぼ同等であることからこれらを唐鏡に分類する見解もあるが、唐鏡中の八花鏡をもとに新たにデザインしたのではないかとする見解もある(註21)。ところで、この文様は鳳凰文と植物文とで型を捺しているのではなく右向鳳凰文+足下のつる草で1文様単位に

なった型を2回捺して成り立っている。つまり1つの型を2回押すことで唐鏡の相對對鳥文を真似ようとした製作技法の簡便化が、鳳凰文の倒立形式を生んだといえる。日本の瑞花双鳥文八稜鏡にみる1類2式の倒立する鳳凰文はこうした簡略化から生まれた文様形式であり、A群1類2式の形成に影響を与えている可能性が大いにあるだろう。実際、倒立する鳥文鏡は他にも作例が存在しており、香川県仲多度郡の金刀比羅宮蔵「唐花双鸞鏡（挿図38）」は同様に倒立した鳳凰文を持つ。ここでも右側の鸞と下の唐花が反対側のものでまったく同じ形をしていることから、同じ1つの型を捺していることが知られる。この鏡は日本で再范した鏡とみられるが、同范鏡は他に例がないという（註22）。また、この鏡はもともとは八花形をしていた鏡の内区部分だけを模したものと考えることもできよう。先の「瑞花双鸞銜綬八花鏡」と同じく、文様の鑄出がにぶく鑄肌も荒れており、量産品である。文様の配置にみる対称性の崩れや外区文様の消滅などは8世紀の唐鏡にはない特徴である。「瑞花双鸞銜綬八花鏡」については文様の上部を平坦にする手法や全体に模糊とした鑄上がりから、あるいはその製作地を朝鮮半島に比定することも可能であろう。

9世紀に製作年代を推測できる作例中の八稜鏡には以下がある。栃木県日光市の輪王寺伝来「唐花双鸞双鳳八稜鏡」（以下、輪王寺鏡と略称、挿図11）は、縁の上部が平らな大陸製鏡の特徴を備えている。この鏡は慈覚大師円仁（794-864）承和14年（847）帰朝時の招来品で、嘉祥元年（848）に二荒山権現の神宮寺・中禅寺へ施入したものであるという寺伝をもつ（註23）。すなわち、日光山にのこる元禄時代の写本「圓仁和尚入當山記」に、

仁明天皇御宇、嘉祥元年^{戊辰}四月十六日、圓仁和尚、始入當寺。（中略）又於社殿内、奉備財施等。

自師主大唐國玄法寺法全和尚、所傳持、金剛經并蘇悉地經^卷、金字法華經^部、善無畏三藏所持菩提

樹子念珠^{羯磨將來}、八葉唐鏡^面、海中現生彌陀四攝所座蓮華^茎、水牛香爐^一、大象牙筆筭^管、揚州國司、

所進海龍王赤衣^{一領}、奉施入權現畢。（中略）齊衡二年^{乙亥}正月 上毛野權講師尊鎮記之。

（仁明天皇の御宇、嘉祥元年戊辰（848）四月十六日、圓仁和尚、初めて當寺に入る。（中略）また社殿内において、財施等を備え奉る。師主大唐國の玄法寺の法全和尚より傳持したところの、金剛（頂）經並びに蘇悉地經一卷、金字の法華經一部、善無畏三藏持せしところの菩提樹子の念珠羯磨將來、八葉の唐鏡一面、海中に現生せる（阿）彌陀（如来）の四攝（菩薩）の座するところの蓮華一茎、水牛の香爐一、大象牙の筆筭一管、揚州の國司進むところの海龍王の赤衣一領、權現に施入し奉り畢る。（中略）齊衡二年（855）乙亥正月 上毛野の權講師尊鎮 之を記す）（註24）

とあるなかの「八葉唐鏡一面」がこの輪王寺鏡であるという。この写本の資料的価値は高くはないものの、史実として承和5年（838）第19次遣唐使に従った円仁らがこの年の7月揚州海陵県に漂着し、さらにここから揚子江を遡って揚州府に入り暫く留まっていることは注目に値する。輪王寺鏡の文様は8世紀前半の鳥旋回鏡形式唐鏡のそれに近い。この唐鏡の鳥旋回鏡形式では小禽4羽か、あるいは双鳳+双禽の組み合わせであること、また界圍が設けられて外区文様と内区文様があること、鈕は半球状であることが特徴としてあげられる。一方の輪王寺鏡は4羽の鳳凰文であること、界圍がないこと、鈕が上部を平坦にした形状であることなど唐鏡にはない形式的特徴を持ち、また文様の鑄出も鈍く鳥文の間に挿入される草花文・雲気文の構成も整然としたところがないことから、その製作年代を

盛唐期以降、8世紀末から9世紀すなわち寺伝の施入時期頃に充てて矛盾はないといえる。

ところで唐鏡には共通した形式が各地で出土する特徴があり、その製作が一地域に集約されていたことを示している(註25)。たとえば『新唐書』地理志には并州(現・山西省太原)と揚州(現・江蘇省揚州)の2カ所が鏡を朝廷に献上していたことが記される。

太原府太原郡、本并州、開元十一年為府。土貢、銅鏡、鐵鏡、(後略)

『新唐書』卷39、志第29、地理3

揚州廣陵郡、大都督府。(中略)土貢、金、銀、銅器、青銅鏡、(後略)

『新唐書』卷41、志第31、地理5(註26)

并州の鑄鏡活動については記録に乏しいものの、揚州についてはいくつかの記録をみることができる。

(前略)天寶元年(742)(中略)若廣陵郡船、即於背上堆廣陵所出錦、鏡、銅器、海味、(後略)

『旧唐書』卷105、列伝第55、韋堅

(前略)大曆十四年(779)(中略)巳未、揚州毎年貢端午日江心所鑄鏡、(中略)皆罷之。(後略)

『旧唐書』卷12、本紀第12、徳宗上(註27)

ちなみに「江心鏡」とは唐王朝へ献上する鏡のことで盤龍鏡のたぐいであつたようである。揚州は献上銅鏡のほか各地の需要に応える銅鏡の市場であつた。稜形で双鸞銜綬帶鏡や双鳳鏡といった花鳥を主題とする文様形式の多いことが揚州出土鏡の特徴であり、その鑄鏡活動のピークは開元・天寶年間およびその後8世紀前半～中葉であることが伴出墓誌から明らかになっている。唐鏡は徳宗(在位779-805)以降、すなわち晩唐期になると種類も減り、技法も衰え、また文様でも花鳥文にかわって卍・八卦・故事といった宗教的な意味合いを持つものが盛行する。そうしたなかで倒立する鳳凰文形式や、あるいは界圏のない回旋形式の鏡というような8世紀・盛唐様式を模倣する復古唐鏡が、9世紀にある地域で製作されはじめ、それが日本へも舶載されているということになる。

さらに、日本に先行して中国ですでに瑞花双鳥文八稜鏡の要素を持つ稜形花鳥文鏡が存在した可能性を示唆する例を挙げる。河北省定州市・静志寺舍利塔は隋時代に創建され、唐・会昌6年(846)の排仏令、また947年の遼軍による破壊を経て、北宋・太平興国2年(977)に再建されたものの、現在は失われている。この舍利塔基の地宮から出土した北魏・興安2年(453)、隋・大業2年(606)、唐・大中12年(858)、龍紀元年(889)、北宋・太平興国2年(977)の石函や金銀器・銅器・玉器・ガラス器・定窯白磁などの陶磁器など700件あまりの遺物と27000枚以上の銅銭がある。この遺物中の「双鳥花枝文六稜鏡」(以下、静志寺舍利塔地宮出土六稜鏡と略称、挿図39)は径6.4cmの小型鏡である。半球状の素鈕で鈕座はなく、縁は上部が平たく、面径と比較して縁幅は広く、鈕も大きい。本作例と同じ文様形式の花形小型鏡は唐鏡になく、また踏み返しによると思われる鑄上がりの悪さから、五代～北宋・10世紀頃に製作年代を比定されている。ただし北宋時代の鏡に類似作例はなく、先の輪王寺鏡の鳳凰文の表現と近似する点から唐・大中12年(858)9世紀中葉まで遡りうるだろう。本作例は日本の瑞花双鳥文八稜鏡の特徴のひとつである旋回双鳥植物文の形式を持っており、8世紀八稜唐鏡にない文様構成がすでに大陸に存在している点、稜形が復活している点があげられる。以上の作例から、8世紀前半・盛唐の稜形花鳥文鏡と9世紀の日本・瑞花双鳥文八稜鏡の時間差・形式差の中に、9世紀の大陸での稜形・花形花鳥文鏡の復活と日本への導入を加えることができる。それは、突如日本で八稜鏡形式が復活したと考えるよりもスムーズであり、日本・瑞花双鳥文八稜鏡の初源形式；「I類(双鸞形)-A群(2羽)-2式(内向旋回)-葉文II/扇状瑞花I/つる草」形式により近い作例の存在をもそのミッシング・リンクとして仮定できるのである。

最後に、大陸製稜形花鳥文鏡が9世紀のみならず10世紀にも日本へ舶載されている例を挙げる。長

野県塩尻市の吉田川西遺跡 SK128 土壙墓から、緑釉陶器・灰釉陶器・土師器・乾漆の容器（八角形か）に入って出土した「瑞花双鳥文八稜鏡」（以下、吉田川西鏡と略称、挿図 40）である。SK128 は伴出緑釉陶・灰釉陶の年代から 10 世紀後半に比定できる。本作例もまた縁や鈕、界圏の形式から日本製ではなく大陸製、あるいは大陸製鏡を踏み返した鏡である可能性が高い。またこの吉田川西鏡が示す鈕の上部を平面にする技法は、鑄型の形式が変わり湯口が鈕の部分に設けられた宋鏡と共通する点である。吉田川西鏡が 10 世紀の大陸製鏡であるとすれば、瑞花双鳥文八稜鏡が同時期に日本だけでなく大陸でも発展していたことになる。しかし吉田川西鏡の文様表現と同時期に盛行していた「II 類（舞鳳形）-A 群（2 羽）-3 式（外向旋回）-葉文 II」形式では様式に大きな差がみられることも事実である。すなわち、日本の瑞花双鳥文八稜鏡はその初源形式を大陸製稜形花鳥文鏡に求めることができるものの、その後は数回の技術的導入を経ながらも独自に形式発展したと結論できる。

むすび

8 世紀第 1・2 四半期に中国・唐で盛行した八稜鏡と、9 世紀の日本の瑞花双鳥文八稜鏡 [A 群-I 類-2 式] の間の形式的・時代的隔絶は 9 世紀の大陸に双鳥文八稜鏡・八花鏡を想定することで消滅する。瑞花双鸞銜綬八花鏡、輪王寺鏡、静志寺舍利塔地宮出土六稜鏡、吉田川西鏡はそれぞれ 9 世紀から 10 世紀にかけて大陸で製作されたとみられる作例であり、唐時代末期に主流であった円形・方形故事・八卦文鏡とは鏡の形式も方向性も一線を画し、一貫して 8 世紀前半の花形・稜形花鳥文鏡を志向している。すなわち当時すでに古式であった半世紀前の盛唐期唐鏡の復古様式であり、9 世紀に登場する日本の瑞花双鳥文八稜鏡もまた復古唐鏡様式の一つとみることができるのである。

その背景に 9 世紀から 10 世紀にかけて唐文化、特に盛唐文化の摂取と復古に熱心であった周辺国家の文化（渤海、新羅等）の存在を併せて考える必要がある。日本もまたこの時期、従来いわれていたように排他的に独自の文化（「和様」）を育てていたというより、むしろ一層鋭敏に「唐物」と「和物」、すなわち外来文化と土着文化を使い分けはじめていた（註 28）。日本の瑞花双鳥文八稜鏡の初源形式に同時代のこうした大陸製双鳥文八稜鏡の影響を考慮することは、すなわち新しい技術・価値観の受容が 9 世紀に存在し、同時に日本がこの時期むしろ貪欲に外来文化・技術を吸収していたことの証明にもなる。9 世紀前半に大きく拡大する東アジア交易圏の中で、中国からもたらされる「唐物」の意義とその社会的役割を考えると、日本の瑞花双鳥文八稜鏡は奈良時代以降の唐鏡・唐式鏡の系譜上に連なった「和様化」なる消極的なものではなく、むしろ積極的に同時代の大陸の盛唐様式指向に影響を受けていたのだとみることができるのである。

註

- 1 高橋建自『鏡と劔と玉』富士書房、1911 年、p.89
- 2 広瀬都巽「唐草双鸞八稜鏡考」『考古学雑誌』第 14 卷第 13 号、1924 年
- 3 後藤守一「瑞花双鳳鏡について」『寶雲』第 1 冊、寶雲舎、1932 年
- 4 中野政樹「和鏡」『日本の美術』42、至文堂 1969 年、p.33
- 5 前掲註 2
- 6 杉山洋「今様の鏡」と「古牀の鏡」—出土八稜鏡より見た平安時代の鏡—『MUSEUM』481、1991 年
- 7 前掲註 3

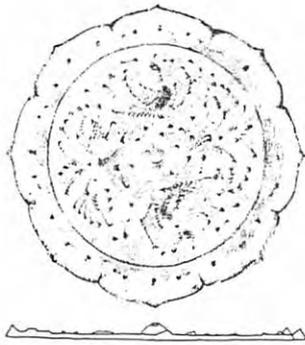
- 8 両翼を振り上げた鳳凰（鸞）を側面観で表現する形式で、手前の翼は大きく振り上げ、奥の翼は畳んでいるようにみえる。双鸞形は唐鏡中では線対称構図に頻出することから、これを対鳥形鳥文と捉える。
- 9 両翼を振り上げた鳳凰を正面観で表現する形式。唐鏡中では異種鳥獸文とともに鈕を中心に旋回する点对称構図中に頻出することから、これを旋回形鳥文と捉える。
- 10 梅原末治「鳥取村の平安期初期の墳墓」『京都府史蹟勝地調査会報告』第8冊、1927年、p.61-66
黒崎直「近畿における8・9世紀の墳墓」『奈良国立文化財研究所学報』第38冊、1980年、p.91-92
- 11 日本道路公団名古屋建設局、長野県教育委員会、長野県埋蔵文化財センター『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書7 松本市内その4 南栗遺跡』1990年、p.157-159。また本鏡についての報告は同p.256-257 小平和夫「第3章遺物 第2節古代の遺物 3 金属製品」。なお本鏡伴出灰釉陶の年代は井上喜久男・愛知県陶磁資料館館長補佐の教示による。
- 12 郡山市教育委員会『郡山東部Ⅲ 穴沢地区遺跡：穴沢館跡・黒田遺跡・馬場小路遺跡・馬場中路遺跡』1983年、p.227、また本鏡についての報告は同p.246。
- 13 広島県教育委員会『亀山遺跡 第1次発掘調査概報』1982年、p.11、SX1028 および本鏡についての報告は同p.18。
- 14 杉本良・岩田貴之「岩手県北上市国見山廃寺跡」『考古学研究』221号、考古学研究会、2009年、p.79-81
- 15 森田稔「石峯寺経塚 遺物の再検討」『神戸市立博物館研究紀要』第8号、1991年 p.13-14
- 16 中国社会科学院考古研究所河南第二工作隊「河南偃師杏園村的六座紀年唐墓」『考古』1986年第5期
- 17 中野政樹「奈良時代における出土・伝世唐式鏡の基礎資料および同範鏡の分布とその鑄造技術」『東京国立博物館紀要』第8号、1973年 p.222
- 18 成瀬正和「正倉院鏡を中心とした唐式鏡の科学的調査」（杉山洋「古代の鏡」『日本の美術』393、至文堂 1999年）p.88-89
- 19 梅原末治「近時所見の本邦での唐式鏡 志摩神島八代神社の遺品其他」『古代学』1-3、古代学協会 1957年 p.242
- 20 前掲註17 p.207
- 21 李蘭瑛『高麗鏡研究』辛酉出版、2003年[韓文] p.133-134
- 22 前掲註17 p.237
- 23 関根俊一「山岳信仰の美術・日光」『日本の美術467』至文堂、2005年
- 24 日光山史編纂室編『日光山輪王寺史』日光山輪王寺門跡教化部、1966年 p.19-25
- 25 孔祥明・劉一曼著、高倉洋彰・田崎博之・渡辺芳郎訳『図説中国古代銅鏡史』中国書店、1991年 p.192-198
- 26 (宋) 歐陽修、宋祁撰『新唐書』中華書局、1975年
- 27 (後晋) 劉昫等撰『旧唐書』中華書局、1975年
- 28 皆川雅樹「九世紀日本における「唐物」の史的意義」『専修史学』第34号、2003年

主要参考文献

- 京都国立博物館『京都国立博物館蔵 和鏡』1997年
- 東京国立博物館『東京国立博物館目録 和鏡篇』1969年
- 青木豊・国学院大学『全国出土和鏡集成（文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書）』2007年
- 梅原末治『唐鏡大鑑』美術書院、1945年
- 久保智康「中世・近世の鏡」『日本の美術』394、至文堂、1999年
- 杉山洋「「今様の鏡」と「古林の鏡」—出土八稜鏡より見た平安時代の鏡—」『MUSEUM』481、東京国立博物館、1991年
- 中川あや「唐鏡の変遷—盛唐期以降を中心に—」『考古学雑誌』第88巻第1号、日本考古学会、2004年
- 中野政樹「奈良時代における出土・伝世唐式鏡の基礎資料および同範鏡の分布とその鑄造技術」『東京国立博物館紀要』8、1973年
- 広瀬都巽「唐草双鶴八稜鏡考」『考古学雑誌』第14巻第13号、日本考古学会、1924年



挿図1 京都府京丹後市弥栄町鳥取出土
径 16cm



挿図5 広島県福山市・亀山古墳出土
径 10.8cm



挿図9 唐花八稜鏡 (秋田・水神社)
径 14cm



挿図2 永延二年 (988) 刻銘
径 11.15cm



挿図6 岩手県北上市・国見山廃寺出土
径 11cm



挿図10 飛雲花喰鳥八稜鏡 (栃木・二荒山)
径 17.9cm



挿図3 長野県松本市・南栗遺跡出土
径 9.5cm



挿図7 旧・石峯寺経塚出土
径 12.76cm



挿図11 飛雲双鷺双鳳八稜鏡 (栃木・輪王寺)
径 14.4cm



挿図4 福島県郡山市・馬場中路遺跡出土
径 6.2cm



挿図8 河南省偃師市・宋偵墓
神龍二年 (706)
径 11.15cm



挿図12 月宮八稜鏡 (群馬・貫前神社)
径 20.6cm



挿図 13 長野・諏訪神社
径 25.8cm



挿図 17 奈良・正倉院南倉 34 号
径 11.4cm



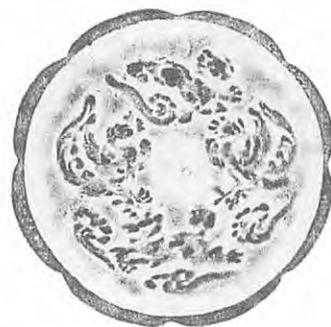
挿図 21 兵庫県・平井古墳出土
径 13cm



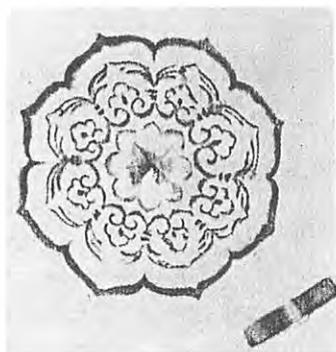
挿図 14 三重・八代神社
径 9.1cm



挿図 18 奈良・正倉院南倉 12 号
径 51.5cm



挿図 22 栃木・男体山山頂遺跡出土
径 9.2cm



挿図 15 奈良・東大寺法華堂
径 5cm



挿図 19 奈良・靈安寺址出土
径 12.5cm



挿図 23 千葉・香取神宮
径 11.7cm



挿図 16 不空罽索観音宝冠内部



挿図 20 東京藝術大学大学美術館
径 20.8cm



挿図 24 千葉・谷津経塚出土
径 16.1cm



挿図 25 和歌山・那智大社
径 13cm



挿図 29 奈良・正倉院北倉 16 号
径 31.7cm



挿図 33 京都・醍醐寺
径 17.7cm



挿図 26 奈良・法隆寺
径 27.5cm



挿図 30 奈良・正倉院北倉 1 号
径 64.5cm



挿図 34 大阪・道明寺天満宮
径 14.15cm



挿図 27 奈良・興福寺鎮壇具
径 6.9cm



挿図 31 奈良・正倉院北倉 3 号
径 43.0cm



挿図 35 奈良・東大寺鎮壇具
径 9.5cm



挿図 28 奈良・興福寺鎮壇具
径 15.6cm



挿図 32 奈良・正倉院北倉 14 号
径 33.6cm



挿図 36 東京藝術大学大学美術館
径 21.3cm



挿図 37 大阪歴史博物館
径 20.3cm



挿図 38 香川・金刀比羅宮



挿図 39 河北省定州市・静志寺舍利塔
径 6.4cm



挿図 40 長野・吉田川西遺跡出土

図1 型式分類

【群】



A群 [2羽]
広瀬拓本 27-74



B群 [3羽]
広瀬拓本 32-2



C群 [4羽]
伊予 (愛媛) 大山祇神社・正9

【類】



I類 [双鷺形]
伊勢 (三重) 多度経塚出土 [部分]



II類 [舞鳳形]
信濃 (長野) 南栗遺跡出土鏡 [部分]



III類 [鶴形]
伝福岡県内経塚出土 [部分]
(旧・石峯寺経塚出土)
広瀬拓本 59-2・粹15

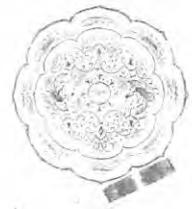
【式】



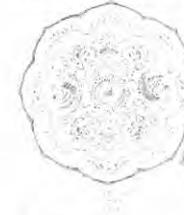
1式 [相對]
広瀬拓本 38-1・正6



2式 [内向き旋回]
広瀬拓本 4-19・粹5
大和 (奈良) 磯城郡出土



広瀬拓本 22-59



3式 [外向き旋回]
広瀬拓本 59-2・粹15
筑前 (福岡) 某処経塚出土



5式 [2式+3式]
粹3
遠江 (静岡) 府八幡宮蔵

[植物文]



扇状瑞花文 I
伊勢 (三重) 多度経塚出土 [部分]



つる草文
広瀬拓本 28-1 [部分]



葉文 III
広瀬拓本 68-2 [部分]



扇状瑞花文 II
大和 (奈良) 金峯山経塚出土 [部分]



葉文 I
美濃 (岐阜) 下切観音堂出土 [部分]



つる状瑞花文
大和 (奈良) 金峯山経塚出土 [部分]



扇状瑞花文 III
京都・泉屋博物館蔵 [部分]



葉文 II
信濃 (長野) 南栗遺跡出土鏡 [部分]

表1 型式による分類

凡例：「基本No.」は広瀬拓本に記される番号である。

「正」=『和親撰』(1919)「枝」=『枝和親撰』(1921)「序」=『和親撰』(1941)の略称とする。番号は各文庫中の作品番号である。分類はⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期の順に大別し、伝世・出土地の地方公共団体コード順に群、式、の順で記す。

群	界	内外区	段差	紐	紐孔	群	類	式	植物文	期	基本No.	旧国名	県	市町村	径	重	材質	特記	
台形	円	高	有	円	A	I	2	扇状梅花I	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	11.7	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	高	有	円	A	I	2	つる状梅花	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	9.2	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	高	有	円	A	I	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	9.9	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	高	有	円	A	Ⅱ	2	草花	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	9.6	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	高	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	8.2	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	高	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	9.2	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	高	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	9	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	高	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	10.8	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	高	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	10.9	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	高	有	円	A	Ⅱ	3	扇状梅花I	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	11	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	高	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	11.8	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	高	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	9.5	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	高	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	12.4	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	高	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	10.3	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	高	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	10.3	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	高	有	円	A	Ⅲ	3	扇状梅花I	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	9.2	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	高	有	円	A	Ⅲ	3	扇状梅花Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	11.8	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	高	有	円	A	Ⅲ	3	扇状梅花Ⅲ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	12	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	高	有	円	A	Ⅲ	3	つる状梅花	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	11.3	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	高	有	円	A	Ⅲ	3	葉文Ⅰ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	9.3	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	高	有	円	A	Ⅲ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	10.4	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	高	有	円	A	Ⅲ	3	つる状梅花	Ⅲ	—	—	下野	山梨	山梨市 内野町	8.3	—	—	水無遺跡	
台形	円	高	有	円	A	Ⅲ	3	扇状梅花Ⅲ	Ⅲ	61-8	—	—	—	—	221.25	—	—	—	
台形	円	高	有	円	A	Ⅲ	3	扇状梅花Ⅲ	Ⅲ	22-95	—	—	—	—	—	—	—	—	
遠角楕	楕	高	有	円	C	Ⅱ	2	扇状梅花Ⅱ	Ⅲ	19-9	—	—	—	—	—	—	—	—	—
遠角楕	楕	高	有	円	C	Ⅳ	5	扇状梅花I	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	12.1	—	—	—	男体山山頂遺跡
遠角楕	楕	高	有	円	A	I	2	扇状梅花I	Ⅲ	60-24	—	—	—	—	10.36	195	白銅	—	
台形	楕	高	有	円	A	Ⅱ	2	扇状梅花I	Ⅲ	68-64	—	(大和)	(奈良)	(会峯山出土)	—	85.87	青銅	[附13]	
台形	楕	高	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	9	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	楕	高	有	円	A	Ⅱ	3	つる状梅花	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	7.9	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	楕	高	有	円	A	Ⅱ	3	扇状梅花Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	9.6	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	楕	高	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	9	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	楕	高	有	円	A	Ⅱ	3	つる状梅花	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	9.8	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	楕	高	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	11.1	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	楕	高	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	山梨	山梨市 高野町	9.2	—	—	不動古墳	
台形	楕	高	有	円	A	Ⅱ	3	扇状梅花Ⅲ	Ⅲ	19-25	—	—	—	—	—	—	青銅	—	
台形	円	低	有	円	A	I	2	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	7.8	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	9.2	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	I	2	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	8.4	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	I	2	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	9.3	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	I	2	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	11.6	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	I	2	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	10.4	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	I	2	—	Ⅲ	—	—	上野	群馬	高崎市 宿大町町	10.5	—	—	天田川神遺跡 11-12世紀	
台形	円	低	有	円	A	I	2	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	12	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	2	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	9.1	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	2	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	伊勢	三重	鳥羽市 八代神社	11.3	—	—	—	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	2	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	9.1	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	2	つる状梅花	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	11.2	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	つる草	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	10.4	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	8.5	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	9.3	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	8.9	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	8.9	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	8.9	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	9.1	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	8.8	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	8.9	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	9	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	8.5	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	9.4	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	10.2	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	10.8	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	10	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	10.3	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	8.4	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	8.4	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	下野	栃木	日光市 男体山	8.9	—	—	男体山山頂遺跡	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	上野	群馬	高崎市 賀保町	9.4	—	青銅	下芝五反田(1)遺跡 11世紀	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	扇状梅花Ⅱ	Ⅲ	—	—	伊勢	三重	鳥羽市 八代神社	9.6	—	—	—	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	伊勢	三重	鳥羽市 八代神社	9.2	—	—	—	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	出雲	島根	八束郡 東出雲町	8.5	—	青銅	陸奥遺跡SK06出土 福地片(柄)付香	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	—	—	備後	広島	福山市 神辺町	10.8	129.3	青銅	壺山1号古墳SK1028出土 鉄刀子、土師器、黒色土器等伴出	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	扇状梅花I	Ⅲ	67-10	—	—	—	—	11.15	172.5	青銅	永延二年(988)銘 個人蔵 [附9、扶1]	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	61-6	—	—	—	—	—	—	—	—	
台形	円	低	有	円	A	Ⅱ	3	葉文Ⅱ	Ⅲ	19-5	—	—	—						

表 2 型式分類表 (2)

		半円孔グループ				円孔グループ				総 数		
		外内区の段差 (高)		外内区の段差 (低)		外内区の段差 (高)		外内区の段差 (低)				
		稜 圏	円 圏	稜 圏	円 圏	稜 圏	円 圏	稜 圏	円 圏			
A (2羽)	I	1	1							1	30	
		2	6	3	1	6 [鳥取村鏡]	1	2	1	7		27
		3			1			1				2
	II	1	1								1	74
		2	5	2		3	1	1	1 [寛弘4年銘]	4	17	
		3	3	1		2	3	11	1	35 [南粟永延2年銘]	56	
	III	1										37
		2	1						1		2	
		3	10 [石峯寺鏡]		2		5	9	1	8	35	
B (3羽)	I	1									1	
		2										
		3										
	II	1										
		2										
		3										
	III	1										
		2									1	
		3	1								1	
C (4羽)	I	1									1	
		2										
		3			1							1
	II	1										
		2										
		3	1 *				1 *				2	
	III	1										
		2					1				1	
		3										
総数		29	6	5	11	12	24	5	54			
		35		16		36		59				
		51				95					146	

*IV(II・III)-5(2・3)

[長久智子作成]

附表-全国出土八種鏡集成

都道府県	遺跡	遺跡種類	所在地	数量	文種	海様	共存遺物	遺跡年代	文献
青森	新田1	溝・堀	青森市大字新田字起野内	1				古代・中世	青森県埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書配布資料2007/12/9
青森	大湊城跡		弘前市新田	1	12	土器		室町	旧岩木町教育委員会 関係人「大湊城出土の鏡、おももり歴史モノ語り45」『朝日新聞』2007年11月14日
青森	大光寺町城跡		平川市大光寺字三井井	1	6			平安	平野町教育委員会「大光寺町城跡第10次発掘調査」2000
岩手	国山山内寺跡		北上市能勢町	2	11			10世紀-11期	北上市埋蔵文化財センター10/19発表 2006
岩手	子飼沢山		八幡平市	1					『考古学ジャーナル』1995年5月号
岩手	—		八幡平市西原町寺田富太郎	1	12				東京国立博物館『図録』1975
岩手	どしの穴		岩手郡巻町	1	12				『岩手県の古蹟』1970
岩手	細之遺所(第28次)		西磐井郡平泉町	1					岩手県文化新報事業埋蔵文化財調査報告書第28巻、1995
秋田	—		能代市二ツ井町二軒子巻	1					『菅江豊隆遺稿』「料の山校」菅江豊隆
秋田	横手市千刈田		横手市雄物川町千刈田	1	10			10世紀後半	『雅志十種』
秋田	白根原1		角館市小坂町	1	8.3			平安時代	秋田県教育委員会「東北縦貫自動車道発掘調査報告書XIII」
秋田	—		由利本荘市金満町	1	11			平安時代	金満町史編纂委員会「金満町史」1990
秋田	にかほ市海老谷地大墓		由利本荘市金満町	1	11			平安時代	奈良徳介『秋田県史考古学編』1960
秋田	扇塚遺跡	祭祀・塚	南秋田郡八戸町直馬	1					大塚隆雄『考古学』1943
秋田	—		仙北郡中仙町豊河三十五	1	14			平安時代	奈良徳介『秋田県史考古学編』1960
山形	羽黒山御手洗池	祭祀・池	鶴岡市	4				平安末～江戸	前田洋子「羽黒山と羽黒山山頂遺跡」『考古学雑誌』第20巻第1号1984
山形	日向野	(表段)	酒田市	1				平安	『山形県埋蔵文化財調査報告書』46、1981
福島	馬場中跡	住居跡	郡山市志田町3丁口	1	12	6.2		平安	郡山史部(目)1983
福島	—		白河市古岡村	1	12				郡山史部(目)1983
福島	ミナト		白河市成子崎	1	12			平安後期	福島県文化財センター「海城地区発掘調査報告書25」1988
福島	奥木内		石川郡生川村生字奥木内	1	9.9	9.9			『奥木内遺跡出土八種鏡の分析』『奥木内遺跡』(財)福島県文化センター、2003
茨城	堀	表段	水戸市	1	7			平安後期	長谷川「茨城県埋蔵文化財調査報告書」『国学院大学考古学資料紀要』第15巻1999
茨城	入ノ上	集落	土浦市外環町	1	11			平安後期	土浦市教育委員会「茨城県土浦市入ノ上遺跡」1997
茨城	新の山	土器墓	つくば市藤原の山	1	7.5			平安後期	茨城県教育委員会文化財調査報告書120「新の山遺跡」1997
茨城	BK3(府台遺跡群)		鹿嶋市	1	7.4			平安中期	『鹿嶋市史』埋蔵文化財調査報告書1991
栃木	和田	集落	足利市月形町	1	12	1.8	土師器・須恵器	平安後期	栃木県立ちちのび県立史跡資料館「栃木の発掘20年のあゆみ」2006
栃木	生駒神社	祭祀	日光市七里	1			灰緑小壺、土師器		日光市史1979
栃木	男体山山頂	祭祀	日光市	110				古墳時代以降	日光市史1963
群馬	赤城山小沼	祭祀・池	南群馬県土草町	11				平安末期	大塚隆雄『考古学』1943
群馬	高野1	住居跡	南群馬県野田町	1	9.9				高野遺跡の調査1986
群馬	高野2	住居跡	南群馬県野田町	2	9.9				高野遺跡—「平安時代集落遺跡出土鏡の性格」『物質文化』49、1987
山梨	城山東		富士山麓市城山東	1	11			平安末期	『山梨県考古学論集』1999
山梨	下之五反田		諏訪市下之	1	9.4			平安末～鎌倉	群馬県埋蔵文化財調査事業団「下之五反田遺跡」1999
山梨	下太田		諏訪市下太田	1	9.4				高野遺跡—「平安時代集落遺跡出土鏡の性格」『物質文化』49、1987
群馬	正徳寺遺跡B区	住居跡	南群馬県野田町	1	11	9.9			正徳寺遺跡群(目)1981
群馬	天田・川神	住居跡	南群馬県野田町	1	11			平安中	天田・川神遺跡 1983
群馬	八寸B	住居跡	伊勢崎市豊城町	1	7.7				高野遺跡—「平安時代集落遺跡出土鏡の性格」『物質文化』49、1987
群馬	本宿	住居跡	高崎市ノノ	2	9.8				本宿・郷土館発掘調査報告書 1981
山梨	大貫寺	経塚	甲州市郡道町難波	1	11			平安時代	東京国立博物館web archives
群馬	神人村1	土坑	佐渡郡玉村町	1	9				『神人村遺跡 群馬県中央管内衛生検査所発掘調査に伴う埋蔵文化財調査報告書』1992
埼玉	一本木前	集落	熊谷市東別府	1	12		土器・小刀	10-11世紀	埋蔵文化財調査報告書(埼玉)1999/3/17
埼玉	那山	祭祀	秩父市西田町太田	1			鏡材跡		埋蔵文化財調査報告書1984/10/25
埼玉	大久保山	墓	本庄市東津	1	8		土師器・銅網	11世紀	毎日新聞1985/11/29
千葉	上総国分尼寺塚	土器墓	市原市惣社	1	9.5		鉄製器・金珠	平安後期	埋蔵文化財調査報告書1980
千葉	高取三王		鴨川市了字天ノ宮	1	7.9		合了・鹿角・鉄製器	平安中～鎌倉	毎日新聞1984/10/8
東京	白山神社	経塚	八王子市中山	1	11		経筒・陶製器	平安後期	『経塚 開成とその周辺』東京国立博物館1989
神奈川	燕了	土坑	逗子市燕了地区	1					かながわ考古学財団『難る燕子の歴史』1995
新潟	田伏山跡		糸魚川市大字田伏山跡	1				古墳～古代	新潟県埋蔵文化財調査事業団『埋蔵文化財』59-2、2007
新潟	相生白山神社		糸魚川市大字相生	1	8.5		懸棺・銅山・銅鏡・土器	古	広瀬拓本集
石川	大友西		金沢市大友町西内	1	6.7			平安	市報129、1996.3 奈良埋蔵文化財センター
石川	白山山頂		白山市	2				11世紀	『古蹟の美 出土鏡を中心として』福井県立博物館1986
石川	米吉部堀	溝	野野原町米吉部	1				11世紀	『古蹟の美 出土鏡を中心として』福井県立博物館1986
福井	樺杖		大野市樺杖	1	9			平安時代	福井県埋蔵文化財調査センター報告2005/1/25 『広報おのの』2005/3
山梨	水無		韮崎市野野町下井	1	8.3		土師器・小刀・灰緑陶	平安後期	『山梨県考古学論集』1999
山梨	白々		南アルプス市白根町	1	8.5			平安中期	『山梨県考古学論集』1999
山梨	二之宮	住居跡	深沢市御成町二之宮	1	9		土師器・土師器・鏡		『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第23巻 二之宮遺跡』1987
山梨	不動	古墳	深沢市一宮町不動	3				平安後期	山梨の考古学1983

山梨	大原		南吹上宮野井	1	Ⅱ	12		平安中期	山梨日々新聞1988/12/14
山梨	石塚	古墳	南吹上八代町永井	2				平安中期	山梨の考古学1983
長野	高森		長野市飯更地区高森	1					
長野	高水寺	仏教用品	長野市若穂保科	3			銅		『日本彫刻史基礎資料集成 平安時代』海保純正監第8巻、1971
長野	松尾字岡		松本市穂積	1				平安後期	長野県史考古資料編1988
長野	一		松本市志原	1				平安後期	長野県史考古資料編1988
長野	市栗	木棺墓	松本市大字島立字高原	2	Ⅱ	9.6	土師器・黒色土器	11世紀前半	市栗遺跡1990
長野	三陸沢川左岸	住居跡	松本市大字和田字市高原	1			土師器・埴輪・灰輪		三陸沢川左岸遺跡(註)1988
長野	広丘		松本市広丘	1					『鏡の文化』長野市博物館1986
長野	金原		松本市栗川	1				10末-11世紀	長野県史考古資料編1988
長野	朝霞原	土塔墓	松本市赤川	1	Ⅱ	7.3	埴輪陶・土師器		長野県史考古資料編1988
長野	大久保		阿智市成田町	1				平安初期	信濃毎日新聞1982/11/5
長野	中村・外堀外遺跡	竈穴	長野市西平野中村	1			鉄器	平安後期	長野県歴史文化財センター 長野日報2003/7/3
長野	井ノ木山前	住居跡	長野市大字北沢	2	Ⅱ	6.5	土師器・黒色土器・灰輪・埴輪	10世紀後半	長野市・近村町の1986
長野	阿弥陀堂	住居跡	長野市横井	4				10末-11世紀	横井・阿弥陀堂遺跡1983
長野	埴原	古墳	長野市平野永徳原	1			鏡(銅製)		森本六郎『加濃国誌地方古蹟の研究』
長野	野石	塚	塩尻市広丘地区	1					関秀夫『埴原の埴輪とその展開』1990
長野	池ノ坊		塩尻市池ノ坊	1	Ⅱ			平安後期	長野県史考古資料編1988
長野	高田川池	木棺墓	塩尻市大字広丘字三ノ口	1	Ⅱ	11	埴輪陶・灰輪陶・漆塗棺	10前-中	高田川池遺跡1989
長野	浅尾		塩尻市深沢地区浅尾	1	Ⅱ				長野県史考古資料編1988
長野	野辺沢	墓	塩尻市深沢地区浅野野辺沢	1	Ⅱ		銅鍔木刀、鉄器、土	平安後期	平出遺跡1955
長野	大平		大町市八坂	1	Ⅱ				長野県史考古資料編1988
長野	野原		佐久市長野町	1			銅、白磁の一部	平安末期	佐久市史蹟調査委員会『佐久市志 歴史編』1995
長野	野原沢		佐久市堀八上野原沢	1					
長野	一本松	古墳	千曲市船岡山町	2	Ⅱ		土師器・雲母・土製瓦玉		森本六郎『八幡原を出した長野の一古墳考古学』1933
長野	大原第二	塚	上伊那郡朝日町	1		6.5			大原第二-第三 1978
長野	赤田		木曽郡木曽町赤田	1	Ⅱ			平安後期	長野県史考古資料編1988
長野	二本松		木曽郡木曽町延島	1			刀器類、鉄器、埴輪		『鏡の文化』長野市博物館1986
長野	中		木曽郡木曽町日長	1	Ⅱ				長野県史考古資料編1988
長野	桑原		下赤井郡桑村	1					朝原健『平安期にみられる山地居住民の遺跡』『信濃』第20巻4号、1968
岐阜	一		岐阜市奥野	1					
岐阜	一		岐阜山下城跡	1	Ⅱ	13	陶器	平安中期	東京国立博物館同版目録1969
岐阜	一		穂市	1					広瀬邦本集
岐阜	(鏡発見)		可兒市下切	1	Ⅰ	10			東京国立博物館同版目録1969
静岡	一		浜松市天竜区水窪町	1					浜松まつくりセンター新聞2007年6月号
静岡	緑塚	塚	三島市北口字吉野崎	1	Ⅱ	9.5			『緑塚 別荘とその周辺』東京国立博物館1989
静岡	山王神社		島田市金谷	1					広瀬邦本集
三重	朝雲山	塚	伊勢志摩朝雲山	1	Ⅱ	11	銅製鏡架、銅製鏡蓋、白磁合子	平安末-鎌倉	関秀夫『埴原の埴輪とその展開』1990
三重	八代神社	祭具	福寿寺神鳥町	12					梅田未治『近時所見の本邦での儀式具』古代学1-3、1952
三重	柳井		桑名郡多度町柳井	1					広瀬邦本集
三重	多度神社		桑名郡多度町	2			銅・青銅・鉄		『緑塚遺址』奈良国立博物館1977
三重	香宮跡(第50次)	木棺墓	多気郡明和町	1			土師器・埴・灰輪陶		香宮跡調査事務所年報1983
滋賀	滋賀里	倉庫跡	大津市滋賀里	1	Ⅱ	9.2			新田洋子『熊河泉出土和鏡の研究』『考古学と地域文化』1987
滋賀	石造寺	池	東近江市石造	2					広瀬邦本集
京都	鞍馬寺	塚	左京区鞍馬本町	1		7			鞍馬寺塚遺跡1933
京都	弁天島	塚	左京区太秦鎌ヶ岡町	2					新田洋子『熊河泉出土和鏡の研究』『考古学と地域文化』1987
京都	福翁塚	木棺墓	伏見区竹田小堀ノ内町	1			土師器・黒色土器		京都府歴史文化財調査報告書1987
京都	福取	木棺墓	京丹後市丹波町福取	1	Ⅰ	16	埴輪・石函	9世紀(7)	梅田未治『福取町の平安朝初期の墳墓』『京都府史蹟調査報告書』第8冊1927
京都	山城国府		乙訓郡大山崎町大山崎	1	Ⅱ	9.9		平安末期	大山崎町教育委員会『山城国府の発掘』1990
大阪	長原・瓜破		大阪府平野区長原(瓜破地区)	1	Ⅱ				『長原・瓜破遺跡発掘調査報告書』XV、2003
大阪	朝橋	古倉跡	堺市東区朝橋	1	Ⅱ	7.3		平安後期	堺市文化財調査報告書第18集1984
大阪	丹上	塚	堺市東区丹上	1				平安後期	信濃新聞1990/3/1
大阪	大岡	塚	堺大岡市	2				平安後期	新田洋子『熊河泉出土和鏡の研究』『考古学と地域文化』1987
大阪	九郎神(53次)		枚方市枚野	1		12	鉄製貼	平安末-鎌倉	枚方市文化財調査委員会『財団法人枚方市文化財調査委員会研究紀要』第2集1992
大阪	箕輪公園	塚	箕輪市箕輪	1			土師器類、白磁合子、刀子		大阪府史1990
大阪	玉手山	火葬場	柏原市	1	Ⅱ		土師器		柏原市歴史文化財調査報告書1990
大阪	栗塚	古墳	藤井寺市古志字栗塚	1	Ⅱ	9.4			東京国立博物館同版目録1969
大阪	神徳寺	表塚	東大阪市長島町	1					新田洋子『熊河泉出土和鏡の研究』『考古学と地域文化』1987
兵庫	高の池	塚	神戸市東灘区高の池	1			和鏡類11面、鉄刀子、銅製鏡架	11世紀	『志願の地 出土品を中心として』福井県立博物館1986
兵庫	石巻寺	塚	神戸市北區淡河町	1	Ⅱ	13	銅製鏡架・行違香	12世紀	塚原高直1977
兵庫	神崎遺跡内田地区		豊岡市	1	Ⅱ	17		平安中期	『ひょうご考古』10号、2003

石塚	西木		西脇市野村町西木	1					西脇市史1983
兵庫	四ツ寺東の石室跡		多可郡多可町西安田	2	8.9			平安後期	『ひょうご考古』10号、2003
奈良	大和生原ノ前(第12次)		奈良市大和生原	1	小瓶	8.3	銅鏡・釘・ミニチュア土器	古墳時代出現	奈良県立橿原考古学研究所『大塚生原遺跡群第12次発掘調査報告発表資料』2000/10/3
奈良	水汲塚古墳		大和郡山八条町	1	華花		黒色土器・瓦器	10世紀後半	奈良県立橿原考古学研究所『水汲塚古墳 埋蔵品報告資料』2002/3/10
奈良	石上神社祭屋		天理市石上町	1	華花				石上神社宝物誌1929
奈良	井戸塚	銅鏡	天理市二重堂町	3					『日本彫刻史基礎資料集成 平安時代』遺像誌記第8巻、1971
奈良	袋塚		天理市別所町	1	華花		瓦器		天理市埋蔵文化財調査報告1986
奈良	忍阪(第4次)		桜井市忍阪	1	II	10	土師器・磁器・釘・鉄製物	平安中期	桜井市埋蔵文化財センター発掘調査報告第26集、2005
奈良	長行寺	仏納入箱	桜井市	1	II	11	漆器	平安後期	『日本彫刻史基礎資料集成 平安時代』遺像誌記第8巻、1971
奈良	常		藤原市常	1	水筒	15			東京国立博物館図録1969
奈良	佐田遺跡群	火葬墓	藤原市高取町佐田字小宮	1		9	鉄釘		奈良県遺跡調査報告1984
奈良	大王山1号		宇陀市磯原町下井足	1			刀子・短鍔・小口		大王山遺跡1977
奈良	神木坂古墳(第1次)	木棺墓	宇陀市磯原町下井足	1	華花	9.8	鉄製物・鉄釘	平安中期	神木坂古墳群1986
奈良	大王山5号	火葬墓	宇陀市磯原町下井足	1	(銅文)		鉄釘・ガラス玉		大王山遺跡1977
奈良	鹿安城	火葬墓	生駒郡三郷町市田	1					奈良県遺跡調査報告1983、25号
奈良	下家		磯城郡川西町下家	1	I	14			東京国立博物館図録1969
奈良	佐野田古墳	火葬墓	北葛城郡河合町佐野田	1					佐野田『日本歴史時代初期遺跡研究』1935
奈良	出原寺	仏納入箱	北葛城郡	1	7.2		五輪	平安後期	『日本彫刻史基礎資料集成 平安時代』遺像誌記第8巻、1971
奈良	笠雲山	聖櫃	内野郡笠雲山	3					東京国立博物館図録1969
和歌山	新羅屋等		東牟婁郡新羅屋町	2			銅製鏡・白磁合子など	平安後～鎌倉	朝秀夫『新羅の鏡とその関係』1990
和歌山	小内山		和歌山県野村大字河内	1					
和歌山	社日	古墳	松江町社日	1		7.8	須恵器・土師器・灰	平安後期	和歌山県教育委員会『社日古墳』2000
和歌山	熊耳		八東郡東出雲町	1	II	8.6	鉄製紡錘車	平安時代	和歌山県教育委員会『熊耳遺跡・聖跡古墳』1998
和歌山	熊田池		八東郡東出雲町	1	華花	8.6	須恵器	平安後期	和歌山県教育委員会『熊田池遺跡』1997
和歌山	郷上	古墳	和歌山県東郷町大和村	1				平安時代	和歌山県大和町教育委員会『郷上遺跡・郷上古墳発掘調査報告』1994
岡山	富貴山原寺	寺院	岡山市船橋	1			小銅鏡・石筥・鉄箱		広瀬祐本集
岡山	美作国分寺	寺院	津山市河辺字国分寺	1	華花				美作国分寺遺跡調査報告1980
岡山	大丸墓		笠岡市大丸墓	2	華花				『岡山県史』第18巻、1986
岡山	吉田	土塚墓	赤松市山崎町河本・和田	1	華花		土師器・土師		山崎町教育委員会『吉田古墳群―和野山第2、5号墳・三蔵塚遺跡』1976
広島	前入原6号墳	古墳	安佐北区前田町大毛寺	1			鉄鏡・金釵・玉・須恵器		『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集1985
広島	西野田		三原市本郷町本郷字西野田	1	I	9.3	銅製鏡・環・青白磁合子など		『経路遺蹟』京都国立博物館1986
広島	出原塚		福山市原塚町	1					『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集1985
広島	魚山	土塚墓	福山市神立町魚山	1	II	11	鉄刀子・土師器・黒色土器		魚山遺跡1982
広島	一	(表形)	廿日市市宮原町大川浦	1				10-12世紀	『内海文化研究紀要』第34号～ 広島大学大学院文学研究科内海文化研究施設 2006
広島	今田		山県郡北広島町今田	1					『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集1985
山口	立野	塚塚	光市大和町立野	1	II	11			広瀬祐本集
山口	上野	塚塚	萩市上野町上野	1	II	9.3			東京国立博物館図録1969
徳島	観音寺	土塚墓	徳島市国府町観音寺	1			人形・木製鏡箱	平安時代	徳島県埋蔵文化財センター年報vol.10,1998
香川	長行		さぬき市長寿町油田長行	1	II	11			香川市歴史資料館『徳の美～讃岐出土・伝来の和器を中心として～』1995
香川	長ノ岡		三豊市意瀬町	1	II	10			香川市歴史資料館『徳の美～讃岐出土・伝来の和器を中心として～』1995
香川	長白方		仲多度郡多度津町長白方	1	華花	6.31			東京国立博物館図録1969
愛媛	長ノ子町(第1次)		松山市長ノ子町	1			土師器・釘	平安中期	愛媛県埋蔵文化財センター『埋蔵文化財報告書』第8集、1981
福岡	飯盛古式		福岡市古式	1				11世紀	『古墳の美―出土品を中心として』福岡県立博物館1986
福岡	深谷内田	木棺墓	小郡市深谷	1			瓦製物・土師器・土師		深谷内田遺跡第3次1972
福岡	門田	木棺墓	春日市上白水	1	華花	7.3	鉄製紡錘車・土師器・銅・口		山崎新幹線開通埋蔵文化財調査報告1977
福岡	日橋	木棺墓	太宰府市大字向日佐野	1	華花	10	鉄釘	9世紀後半	太宰府市教育委員会3/12発表、2004
福岡	宮ノ本		太宰府市大字向日佐野	1	II	9.5	鉄製毛皮・青銅片		太宰府市教育委員会『太宰府・佐野地区遺跡群V』1995
福岡	太宰府120次		太宰府市大字日置山	1	II				太宰府史跡1990
福岡	朝雲川南条坊	瓦葺塚	太宰府市南条	1		7.6			福岡市ハイパースペース埋蔵文化財調査報告第6集1977
佐賀	北垣		佐賀市大和町	1					大和町教育委員会『北垣遺跡』2004
佐賀	長倉		東松浦郡玄海町長倉字鬼塚	1			青銅鏡・白磁銅		田舎町商工会ホームページhttp://www.netfour.ne.jp/~g-kanko/
長崎	海神社		対馬市海神社	2				12世紀	奈良文化財研究所埋蔵資料『対馬の鏡』2004
熊本	塚敷		熊本市白根町	1					熊本考古第3号1983
熊本	西ノ		八代市志保町	1	I	11			九州考古学第23号1964
熊本	東原	木棺墓	下益城郡埴山町今西野	1			須恵器・土師器		熊本日々新聞1989/1/26
熊本	岡ヶ池		埴山郡小国町岡ヶ池字塚	1					熊本考古第3号1983
鹿児島	環元		指宿市山川町環元	1					『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集1985

本集収録は1991・頁42005の年報に凡丸遺跡15号1例を附加したものである。